

守 破 創  
対談

茶道の様式美を体現するお点前には、代々受け継がれてきた確固とした形がある。ところが、千宗匠は、「お点前の所作や『間』に、お茶を点てる『人』がにじみ出る」と言う。一見同じような動作の中に、茶道経験ばかりでなく、人生経験や性格によって醸し出される違いが表れるのである。お茶や禅を嗜んでいる中村審議委員との対談の中から、日本人の心の持ちようから不易流行に通ずるものまで、さまざまな興味深い話が飛び出してきた。

た ま  
おいしいお茶を点てる「間」に  
人それぞれの味が出る



日本銀行政策委員会審議委員  
中村清次  
Seiji Nakamura

【なかむら・せいじ】1942年福岡県生まれ。1965年慶應義塾大学経済学部卒業後、(株)商船三井に入社。1992年財務部長、1994年取締役経理部長、1995年取締役企画部長、1996年常務取締役、1998年代表取締役専務、2000年代表取締役副社長、2003年商船三井フェリー(株)代表取締役社長、2007年より日本銀行政策委員会審議委員。



茶道表千家第一四代家元  
千宗左  
Sousa Sen

【せん・そうさ】1938年京都府生まれ。第13代の長男で1980年に第14代宗左を襲名。法号は而妙斎。1990年利休四百年遠忌を主宰する。京都府文化賞功労賞受賞。紺綬褒章、紫綬褒章受章。著書は、「茶の湯随想」(主婦の友社)、「はじめての茶の湯」(主婦の友社)など多数。



## 長火鉢を囲んだ 何げないティータイム

**中村** 新年の初釜を皮切りに、神社やお寺の献茶や講演、支部行事など、茶道家元の一年は大変お忙しいのでしようね。

**千** 日々の生活の中にお茶があるというか、会社勤めの方のように仕事の日と休みの日というような曜日の感覚はありません。お茶の家元としての行事は、曜日ではなく日にちでとらえるものです。例えば、三と八の付く日が家元でのけいこ日とか、十四日は特別けいこの会だとか……。ところが、地方での催しは、大体土曜日から日曜日です。神社やお寺で神様、仏様にお茶をお供えする献茶の行事や各県の支部の行事などに出席します。

**中村** 家元は一日にどれくらいお茶を召し上がるのですか。

**千** 家ではお昼前とお昼からと最低二回は、茶席以外でも飲む機会があります。住まいには長火鉢があって、そこでは朝からずつとお湯が沸いています。そこへ内弟子が来て、お茶を一服、二服……ティータイムです。

**中村** 小さいころは、私の生家に茶室らしきものがあり、夜になるとそこに家族が集まってお茶をいただくことがよくありました。

**千** そのままですよ。みんな集まって来てのティータイムです。

## 利休直系として 「流れのまま」に継承

**中村** わび茶(わび・さび)の祖、千利休さんについて、テレビや小説、コミックまでが取り上げています。精力的で有能な堺の商人とか、美意識を頑固に貫く反骨の人とか、政界の陰のフィクサーなどなど、さまざまに語られています。

私は、長谷川等伯の描いた利休像を見て、割と大柄な方のお見受けしました。直系の子孫としての利休観を、お聞かせ

ください。

**千** 利休さんの四〇〇年忌の際に、しまつてあったよりの修理をしました。その時に、私は胴巻きだけ着せてもらったんです。当時私は今より太っていました。結構大きな人だったのだと感じました。結構大きな人だったのだと感じました。人物像そのものについては、会ったことのない人ですから、私たちが言い伝えとか、書物や学者の先生方の話から、こうだったのかなという自分なりのイメージをつくっているのです。利休さんのお茶もあくまでも想像でしかありません。ただ、お茶については、私は専門家ですから、残っている道具や会記(茶会の記録)などを見たりして、自分なりのイメージは出来上がっています。

**中村** 家元は一四代目として四〇〇年を超える歴史を継承されたわけです。表千家の嫡男としての自覚はいつごろからお持ちになったのでしょうか。

**千** 流れのままというか、自然にですね。父から、「継がなければいかんぞ」などと言われたことはありませんし、自分の息子にそんな話をしたこともありません。お茶は普段の

生活の中にあるわけですから、内弟子の人たちにも、「けいこしろ」と言ったこともありませぬ。私も自身のためのおけいこはほとんどしたことがないですね。普段の様子ですべてけいこにつながっていると思います。

**中村** 先代の即中齋宗匠はそれとなく後継者教育を行っておられたのではないのでしょうか。

**千** 一番大切な物が収蔵されている特別の蔵へ入る時に、「おまえもついてこい」と言われました。お茶会のための道具の準備です。そこで、父が道具を合わせているのを見て何となく覚えていく。父のやり方を自然に覚えて、代を継いでもやっていたという感じ。そのうちに、自分なりのお茶の風が自然に出てくる。今息子はそれを見ているのでしよう。将来、自分で実際に蔵へ入って行った時は、私がやったことと同じことをやるでしょうね。

**中村** 書いたものでは残せない伝統とか文化などを、世襲である家元制度により、しっかりと継承されてこられたことがよく分かります。

**千** 「見て覚える」ということだろうと思います。不審庵というお茶席

を正式なお茶事るときはよく使います。お茶席の構造上、ちょっと特殊なお点前をしなければなりませんから気になります。そこで、戸の下のちよつとしたすき間からのごくわけです。よく見ると廊下のその部分だけちよつとはげているんですね。みんなやはりそこからのぞいていたのです。

## 間に個性が出るのがお茶の魅力

**中村** 茶道は日本の伝統文化が凝縮された総合芸術と言われていますが、その魅力は何ですか。

**千** お茶は、その人その人の感じ方が全部生きてくるものです。お点前には決まった形がありますが、自分を活かす部分が多くあるのが、お茶の魅力だと思います。実際にお客さんをお茶で呼んでお点前をするときには、その人の持ついろいろなことがお点前に表れてきます。その表れた形が、人によって違つたつて別に構わない。このように自分の持ち味を活かせるところが面白さであり、お茶の楽しみだと思います。ですから、お点前をビデオに撮つて指導するということは一切やりません。ビデオ

オでは次の動作への「間」が全部出てしまします。間はその人の性格がにじみ出てくるなど、何とも言えぬ味があるのです。みんなが同じでは、お茶として面白くなりません。

**中村** なるほど、そうでしょうね。自分の持ち味が生きてこそのお茶ですか。そこまで行けると、本当の楽しさが分かるのでしょね。絵で言えば、基本のデッサンができていないと、自分流に崩そうにも崩せないものです。

**千** やはり、しばらくの間はきちつとしたお点前を覚えなければいけないから、しんどいなということがあると思うんです。私はいつも言っているんです。お点前は基本だから大切だ。だが、何といつてもおもしろいお茶を点てなければいけない、とお客さんとの会話の中で自然に場をつくり上げていく、そういう意味でのおいしいお茶もあるでしょう。きつちりお点前をする、場の中にすうつと引き込まれて、会話の中にいろいろなことが自然に入つてきて、だんだんお茶がおもしろくなる、それが最高のお茶と言えます。この広がりがお茶の魅力ですが、そこへ行き着くのはなかなか大変です。

## 時代を超えて伝えるべきものがある

**中村** 茶道の歴史の中で、今はどんな時代と言えるのでしょうか。

**千** 今は難しい時代ですね。畳の部屋が減ってきましたし、座るということがなくなってきました。とはいえ、無理に時代に合わせて変えていくことはよろしくありません。根本は、畳に座つてやることです。床の間に飾つた掛け物を見るにしても、使う道具にしても、全部座つてやることですから……。このような畳の部屋にたまに来て、座つてきつちりしたお茶をいただく。その時だけでも、お茶つていいものだな、おもしろいなと感じてもらいたい。家へ帰つたら、ソファで自由に魔法瓶からお茶を点てるのもいいでしょう。でも、ちゃんと座つてお茶を喫する良さだけは、ずっと残しておかなければいけないと思います。特にわれわれ茶道に携わる者の場合は、きつちりとしたお茶を見せて、いいなと思つてもらえるような努力を続けなくてはなりません。

**中村** どんな時代になつても、根本は変えてはならないわけですね。

**千** それを押し付けるわけじゃないに、一服飲んで、「やはりいいものだな、日本人だったんだな」と思つてもらえるような場所をいつまでも維持することです。

**中村** 衣食住すべてにわたつて日本の伝統的な生活様式が急速に変化してきていますし、日本人の感性とか精神性の基底をなすといわれる季節感もだんだん希薄なものになつてきているように感じます。また、人と人とのきずなというのが薄れつつあるような感じがしますが、このような社会の変化をどうとらえていますか。

**千** あるときに、お茶のことはあまりご存じない父の友人たちを招いたことがあります。最初は今までのお茶席とはだいぶ雰囲気の違い、勝手な会話が進んでいます。ところが、そのうちにだんだん、いい雰囲気になつている。大茶人のお茶会と変わります。亭主（茶会を催す主人）とお客さんとの間がうまくいってれば、何の不自然さもなくお茶会ができるのかもしれない。

**中村** 亭主の人間性が、みんなを誘導して、そういう雰囲気醸成するのかもしれないね。



になったわけでしょう。こうした流れの中でお茶ができたなら、「みんな大茶人やん」という雰囲気が出てくる。こういう良さだけは絶対残しておかないといけませんね。

### 日本人の心象風景にある 禅とお茶の心

**中村** われわれ日本人は、心の中に四季の移ろいや自然を愛する心が宿っていて、それらを求める心があると思います。若い人も同じではないでしょうか。

**千** それもあると思います。古いものを次に伝えていくために残すというだけではなく、それを一つの台座にしてやっていくことで、昔からの日本の生活も残っていくでしょう。そういう意味で大事なことだと思います。

**中村** お茶室のたたずまいとか、お道具などが作り出す空間が、精神的な緊張感を伴って、お茶の世界に導いてくれるのでしょうかね。

**千** 茶庭を通り、だんだんいい雰囲気になって、いよいよお茶席の中に。最初は緊張していても、小さい部屋の中へ入ったら私たちと友達だけ

されて、家元も而妙斎じみょうさいという法号をお持ちですが、禅とお茶にはどんなつながりがあるのでしょうか。食事の作法なども、禅とお茶は類似点多いですね。

**千** やはり切っても切れないものがあります。食事一つとっても、お茶と禅はもともとは一緒のものという気はいたします。

**中村** お茶を極めたら禅も一緒だという人がいます。茶室で静かにお釜の煮える音を聞いていますと、座禅と通じるところがある感じもしますね。

**千** 釜の煮える音がずっと聞こえている時は、座禅の場で座っている時と気持ちは一緒というようなところがあるのかもしれない。

### グローバル化しても やはり京都がベース

**中村** 最近、クールジャパンの魅力の一つとして茶道が挙げられています。茶道は、日本の四季折々の季節感や自然、さらには日本人の人生観とか繊細な感性などに深くかわっています。海外の人にこうした点をもっと理解してもらうには、どうしたらいいのでしょうか。

**千** 海外ではハワイとロサンゼルス

とサンフランシスコ、ニューヨークに支部があります。お茶というものを見て、飲んで、ああ、こういう雰囲気はいいと向こうにいて思っておられるのはいいですが、さらに言うと京都へ来て本当の場に一回座ってもらいたいですね。向こうで好きでお茶をやられている方は、私たちがびつくりするぐらい勉強しておられますし、本当に好きでたまらないという人がいます。そこまで好きだったら、ぜひ京都へ来てほしい。

**中村** お茶の本質をきちんと伝えるためには、海外にどんな支部を増やせばいいということではないのですね。

**千** 支部を作ったら作りっ放しではいけません。一方で、ある程度支部を作り、お茶を嗜む人を増やさないと熱心な人がでてこないでしょうし、難しいですね。

**中村** いろんな出会いをとらまえて、できるだけ多くの人々にお茶に親しむ機会をつくっていくということなのでしょう。今日は、家元の生活やお茶の魅力について貴重なお話をお聞きすることができました。お忙しいところ、本当にありがとうございました。